

3. 学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生スタッフが中心となり、ボランティアの第一歩となるような活動や啓発の場を提供しています。センターでは、日常的、定期的に行えるボランティアを数多く紹介、また、学生が社会の課題に気づけるようなイベントを実施して、ボランティアの裾野が広がることを目的として活動しています。

事業名	リユース傘プロジェクト in 深草（継続企画12年目）
日時	2018年4月1日（日）～2019年3月29日（金）
場所	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
利用者数	延べ125名
企画メンバー （学生スタッフ）	山田真己（経済4） 江上春葉（経営4） 中野優太（文学3） 吉田 響（文学3） 小松舞由子（経済3） 丸山莉佳（経営3） 渡辺早耶（経営3） 安岐 萌（法学3） 石崎絵梨香（法学3） 奥田萌々（法学3） 山田京花（政策3） 長谷川鈴音（経済2） 吉田 樹（法学2） 佐々木大悟（政策2） 佐藤鴻河（政策2） 松尾宗次朗（経済1） 西村志穂（政策1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（深草）では、学生部に届けられて所定の期間保存し、廃棄することになった落し物の傘を譲っていただき、突然の天候の崩れ等で傘を必要とする学生や教職員にリユース傘として貸出している。

この企画は、「傘を持っていない突然の雨のためだけに傘を買うのはエコじゃない」という思いから始まった。現在では環境啓発目的だけではなく、傘をきっかけに来室する機会をセンターの広報機会と捉え、貸出し手続きの際に、活動内容などを広報する事を目的とする。

2. 概要

(1) 貸出しまでの流れ

- ①傘を借りに来た方に学生証や教職員証の提示をお願いし、貸出し用の傘から選んでもらう。
- ②学籍番号、氏名、電話番号を記入してもらい、学生証と照らし合わせて確認する。
- ③選んでもらった傘の個体番号を記入し、貸出し期間（1週間）を伝える。
- ④傘の返却が遅れた場合、電話連絡をすることを伝え終了。

(2) 期日を過ぎても傘の返却がない場合

1週間を過ぎても返却されなかった場合、3日以内に返却するように利用者に電話し、リユース傘を紛失した場合は代わりの傘を持参するよ

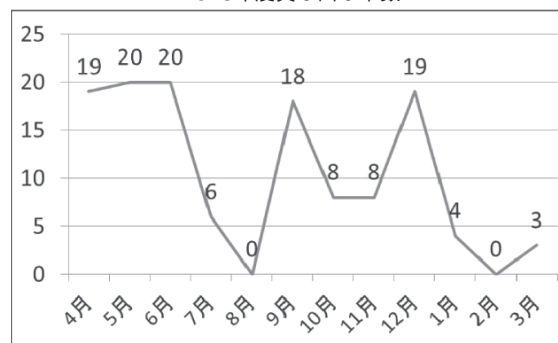
う伝える。

※傘を盗まれた、不慮の事故により傘が壊れた等で返却が不可能となった場合は柔軟に対応する。

3. リユース傘貸出しデータ

次の表のとおり、年間125本貸し出した。

2018年度貸し出し本数



4. 参加者の声・得られた効果など

- ・貸出しの際にセンターやボランティア情報の広報を行えた。
- ・出張傘貸出しの際に、センターの場所が分からない人に対して広報活動を行うことができた。

5. 学んだこと・今後の課題

今年度は、天候に左右された部分もあるがセ

センターの場所と傘貸出しを知らせる立て看板の設置やポスター掲示等の活動が消極的になってしまったため、昨年（138件）より貸出し数が減少した。しかし、前期に突然雨が降ってきた際、ウッドデッキに出て出張で貸出しを行ったところ、センターの場所や活動内容を知らない方が借りに来るなどの効果が出たので、来年度はこの様な活動も積極的に行いたい。また、

7月に実施したアタックボラセンでは、センター移転によりセンターの場所がわからない方が多いことが判明した。来年度は傘貸出しをきっかけにセンターの広報を行っていきたい。

6. 経 費

なし

〈報告者：吉田 樹〉

事業名	Re-Use 傘プロジェクト in 瀬田（継続企画2年目）
日時	2018年5月1日（火）～2019年3月29日（金）
場所	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
利用者数	延べ151名
企画メンバー （学生スタッフ）	多田裕貴（理工3） 加藤翔汰（農学3） 山元 樹（理工2） 乾 佐枝子（社会2）

1. 経緯・目的

予期せぬ天候の乱れで傘がなく困っている方に対してボランティア・NPO 活動センター（瀬田）でリユース傘を貸し出す。使用するリユース傘は、学生部（瀬田）に一定期間保管された後に廃棄される落とし物傘を譲ってもらい活用する。傘の貸し出しをきっかけにボランティア情報やセンター事業を紹介して、センターを知ってもらう機会とする。

て、貸出状況を確認する。

④返却期間を過ぎた場合には、メールで連絡をし、返却を促す。

*貸し出しだけではなく、センター事業やボランティア等を紹介する。

2. 概要

(1) 日時

ボランティア・NPO 活動センターの開室時

(2) 対象

龍谷大学学生・教職員

(3) 広報方法

立て看板・広報誌に挟み込み・Let's ボランティアなど

(4) 傘の貸し出し手順

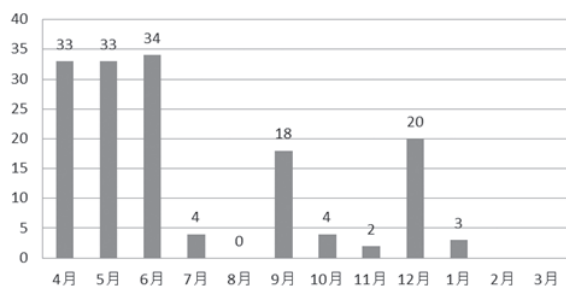
- ①傘を借りに来た方に、貸し出しファイルへ氏名、学籍番号または職員番号を書いてもらい、傘を選んでもらう。
- ②学生スタッフは、選んでもらった傘の個体番号を記入し、貸し出し期間は1週間であることを伝える。
- ③各傘の返却期限をホワイトボードに書き



3. リュース傘貸し出しデータ

次の表のとおり、年間151本を貸し出した。

2018年度貸し出し本数



4. 学生スタッフの声・得られた効果

(1) 学生スタッフの声

- ・傘の貸し出しをきっかけに、ボランティア・NPO 活動センターを知ってもらえる機会となった。
- ・廃棄される傘が使われるという点で環境によい。

(2) 得られた効果

今までボランティア・NPO 活動センターの存在を知らなかった人も、リュース傘の貸し出しをきっかけに、センターの場所、センターがどんなことをしているのかを知ってもらえた。

ボランティア・NPO 活動センターについて

知っている学生でも入りにくいという声が多々あったが、このプロジェクトがきっかけでセンターに入りやすくなったとの声があった。

貸出時や返却時に情報提供をすることで、ボランティアや企画の広報につながった。

5. 学んだこと・今後の課題

傘貸し出しの管理方法のひとつとして、ホワイトボードに傘の貸出状況の一覧表を作ったところ、返却期限が過ぎたり、紛失しているものが多くあることが視覚的に一目でわかるようになった。

今年度、メールでの返却のよびかけ連絡だけでは十分でないとの反省があったので、来年度からは貸し出しの時点で電話番号を本人に書いてもらい、返却が期日までにない場合、電話で連絡することに変更する。

傘を借りに来た学生の中には時間に余裕がない時もある。急いでいても簡単に伝えられる広報方法を準備しておくことが必要だ。

6. 経費

消耗品（テープ） 2,260円

〈報告者：山元 樹〉

事業名	2018年度深草キャンパス広報誌『ボラゴン』（継続企画10年目）
日時	2018年4月1日（日）～2019年3月29日（金）
場所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）学生スタッフ広報班
企画メンバー （学生スタッフ）	原 弘樹（経済4） 伊藤万莉（経営4） 松坂智彰（政策4） 平尾匡識（文学3） 土橋茉奈（文学3） 脇坂弾夢（文学3） 米本圭吾（経済3） 坂井 綾（経営3） 寺島安里沙（経営3） 木村太翼（文学2） 井上愛加（文学2） 荻原主基（経営2） 川村有希（政策2） 松田侑子（国際2） 岩本侑輝乃（短大2） 神田瑞季（経済1） 世田丈貴（法学1） 森清文聡（政策1）

1. 経緯・目的

広報誌『ボラゴン』（以下、本誌）の作成・発行を以下の3つの目的で行った。

- ・本誌を通じて学生にボランティア活動に興味を持ってもらう事。
- ・ボランティア・NPO 活動センターの認知度・利用者数の向上を図る事。

- ・本誌の発行を通して学生スタッフがボランティア活動への知見を拡げる事。

2. 概要

以下の通り年間4回、計2500部を発行した。

○春号8ページ（1500部発行）

- ・センター紹介

- ・学生スタッフインタビュー
- ・ボランティア分野の紹介
- ・伏見でできるボランティア紹介
清掃活動ボランティア FUSHIMI
GREEN ACTION／学習支援ボラン
ティア STEP
- ・龍大付近にあるボランティア MAP
- 夏号8ページ（500部発行）
 - ・新学生スタッフインタビュー
活動を始めた理由／入門講座の感想
 - ・ボランティア紹介
てんとうむしマラソン／地藏盆
 - ・学生スタッフ企画紹介
サマーフェスティバル2018／夏合宿
- 秋号8ページ（500部発行）
 - ・センターの場所について
 - ・センターの利用方法について
 - ・ボランティアの魅力とは？
 - ・ボランティア紹介
小倉山百人一集の会／南青少年活動セン
ター
- 冬号8ページ（300部発行）
 - ・ボランティア紹介
アビリンピック／ベルマーク収集
 - ・龍大付近のボランティア団体紹介
竹と緑／稲荷の家ほっこり
 - ・身近なボランティアのメリット
 - ・センターの紹介と利用方法



3. 参加者の声・得られた効果など

本誌を見てセンターへ来室し、実際にボランティア相談にまで至った学生が6人あった。

企画メンバーにとっては、記事を作るためにボランティアに参加する事でボランティアに対する知識を深め、記事作成を通じて班活動の意義を深く知る事ができた。

4. 反省点

後期から班長の所属キャンパスが変更した事によって、昼休みに行う班ミーティングへ出席する事が困難となり、記事内容の修正に係る助言・意見交換がLINE上でしか行う事ができなかった。その事も影響して、秋号・冬号の製作過程を円滑に進める事ができなかったため、いかに班員と直接コミュニケーションを行う事が必要であるか気づかされた。

5. 学んだこと、今後の課題

本誌の作成は広報班において長く続いている活動であり、前号や去年の同時期と記事が被らないような配慮はしているが、“記事内容のマンネリ化”という事態は否めない。しかし、記事のバリエーションに重点を置くよりも「今、センターでは何を伝える必要があるのか。」という点を見据えて記事を考える必要があると感じている。例えば、同じテーマで切り口を変えた記事を数号に渡って連載するなど一案だ。

また、記事の作成には誤字脱字・事実確認等の校閲作業をする必要があり、思っている以上に時間と注意力が必要とされる。そのため、班長だけではなく、班員全員の意識と努力が要される。次年度の班員からは「ボラゴンを製作するだけでなく、それ以外のことにも班内で取り組んでいきたい。」という意見が出ているので、本誌を着実に進めつつ、新しい取り組みを検討するよう助言していきたいと考えている。



6. 経 費

消耗品（コピー用紙） 3,380円

〈報告者：平尾 匡識〉

事業名	2018年度瀬田広報誌「Volunteer News」の発行（継続企画10年目）
配布期間	2018年4月2日（月）～2019年3月29日（金）
場 所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）学生スタッフ広報班広報誌係
企画メンバー （学生スタッフ）	仲上昂希（理工4） 瀧本真由（農学4） 杉村歩美（社会3） 玉田遼河（社会3） 藤野凌河（社会3） 永井沙季（理工2） 井上沙雪（社会2） 澤 優希（社会2） 田井拓暉（社会2） 村田大河（社会2） 松本優甫（理工1） 東 里音（社会1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）では、2009年度より、センターの活動や企画、また学生スタッフのボランティア体験を親しみやすく記事にし、学生スタッフの目線ならではの広報誌として発行している。

広報誌を配布することで、ボランティア・NPO 活動

センターの本学学生や教職員への認知度を高めるとともに、当センターへの来室者の増加を目指し、ボランティア啓発を行うことを目的とする。

2. 概 要

(1) 春号（2,000部発行）

配布時期：4/2～4/6

内容：センター紹介、学生スタッフの紹介、学生スタッフの募集

(2) 夏号（600部発行）

配布時期：7/9～7/11

内容：センターの紹介、ボランティア紹介

(3) 秋冬合併号（500部発行）

配布時期：10/29～10/30

内容：センターの紹介、学生スタッフがボランティアに行った感想、災害について

(4) 配布・設置場所

学生スタッフによる手配り、ボラセン会議・説明会・報告会での配布、センター（瀬田）・学友会館パンフレットスタンド、V コーナーに配架

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・ 広報誌を手配りすることにより、センターの存在を多くの学生に知ってもらうことができた。
- ・ 広報誌をきっかけとし、センターで紹介しているボランティアやセンター事業に興味をもってもらうことができた。

4. 反省点

広報誌係の本来の目的はボランティア啓発であるが、広報誌を作ることが目的になってしまっていた時期があった。配布については学生スタッフ全員で配ることにしているのだが、配布スケジュールを連絡することを忘れていたことがあり、反省点である。

センターやボランティアを学生教職員に伝え広めるといふ広報誌の本来の目的を意識しつつ、作成に時間的余裕を持ち、広報誌係のそれぞれのメンバーの強みを活かした記事を作れるよう励みたい。

5. 学んだこと・今後の課題

配り手が集まる時期と集まらない時期があった。配り手不足の問題は以前からあったが、今年の秋は特に不足することが多かった。広報誌係のメンバーと一緒に多くの学生スタッフで配れるように、参加の呼びかけを工夫したい。そのために、広報誌配りへの理解・意義を学生スタッフ内で共有したり、ミーティングで議論して、学生スタッフ全体の意識づくりをすすめたい。



6. 経 費

消耗品（A4用紙500枚 15束）	4,665円
インク	1,592円
合計	6,257円

〈報告者：澤 優希〉

事業名	Let's ボランティア ～ボランティアしようよ！～（継続企画9年目）
日時	春編：2018年5月7日（月）・8日（火）昼休み（12時35分～13時25分） 夏編：2018年7月2日（月）・3日（火）昼休み（12時35分～13時25分）3・4講時 秋冬編：2018年12月3日（月）～21日（金）終日
場所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー （学生スタッフ）	多田涼太（理工4） 松澤宏紀（理工4） 濱野瑛奈（社会4） 藤村一樹（社会4） 上村真衣（社会3） 樋上翔太（理工2） 頼田翔平（理工2） 石川秀凱（社会2） 奥村 遥（社会2） 木村卓真（社会2） 正中菜帆（社会2） 瀬戸山瑠衣（農学2） 青山友香（社会1） 赤木宏斗（社会1） 近藤真佑華（農学1）

1. 経緯・目的

「ボランティアには少し興味があるが、センターには行きにくい」と考える学生に対し、学生スタッフがセンターの外へ出てボランティアに参加するきっかけを提供し、龍大生や教職員に興味をもってもらうようにする。

また、瀬田キャンパスの学生スタッフの「センターの利用者を増やす」「ボランティアの楽しさを伝える」という目標に沿って各編で行う。

（1）春編

クリアファイルに龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター（以下、センターと略す）の概要などを掲載したチラシを挟んで配る。また、参加しやすいボランティアを大きい看板で紹介して、ボランティアが行きやすいものであることを紹介する。センターの場所や概要の認知度向上とともに学生スタッフの募集も呼びかける。

（2）夏編

各分野のボランティアの情報を掲載したチラシを配るとともに、七夕企画を同時に実施し、ボラセンに興味を持ってもらうような啓発を行う。夏休みという長期休暇の間にボランティアに行ってもらえるような広報を行う。また、七夕という伝統的な日本の行事で季節感を味わってもらいながらセンターの場所を知ってもらう。

（3）秋冬編

12月度のボランティアをカレンダー形式にして見やすくし、ボランティアへの参加を促す。カレンダーはセンター前の掲示板をはじめ各号館に張り出し、センターに行きにくい人たちにもボランティアに少しでも興味を持ってもらえるようにする。またカレンダーだけではなく三角柱にも情報を掲載する。

2. 概要

（1）春編

日時：5月7日（月）・8日（火）昼休み

場所：食堂ステージ前

内容：センターの概要を掲載したチラシをクリアファイルに挟んで配る。大きい看板に行きやすい分野のボランティア（祭りのボランティアなど）を紹介する。



（2）夏編

日時：7月2日（月）・3日（火）昼休み・3限・4限

場所：チラシでの広報⇒食堂ステージ前

七夕の笹⇒センター前

内容：夏におすすめのボランティアを掲載したチラシを配布する。センターでボランティアコーディネートを受けてくれた方に短冊を渡し、七夕の季節感を味わってもらう。



（3）秋冬編

日時：12月3日（月）～21日（金）終日

場所：学生交流会館、智光館、2号館、4号館、6号館、7号館、9号館、生協食堂、センター前掲示板

内容：各掲示板に12月度のボランティアの情報をカレンダー形式で提示したものを貼る。智光館・学生交流会館に関しては、ボランティアのチラシも一緒に設置し、気軽に持ち帰ることができるようにする。生協食堂には三角柱を設置する。

3. 参加者の声、得られた効果など

(1) 春編

- ・チラシを受け取ってくれる人が多かった。
- ・チラシを配るのが苦手な人も、学内に人が多かったので配りやすかった。
- ・ボランティアをやりたいと思っているもののなかなか一歩が踏み出せない人たちに対して、学生スタッフが選んだ比較的参加しやすいボランティアをおすすめするのも効果的な方法のひとつということが分かった。

(2) 夏編

- ・センターの前に笹を立て、七夕の短冊を飾るというイベント性を演出したことで、センターに立ち寄り、ボランティアコーディネートを受ける人が増えた。
- ・チラシを受け取ってくれる方も多く、夏休みという長期休暇にボランティアに行こうと思っている人は多いということが分かり、積極的に紹介していく必要性を感じた。

(3) 秋冬編

- ・センターの外にボランティアのチラシやボランティアの日程を可視化できるカレンダーを設置することによって、立ち止まり、実際に手に取って見てくれる人がいた。
- ・構内のセンター外の広い範囲にわたって広報するというやり方はLet's ボランティア

では初めての試みであった。実際に足を止めて掲示物を見てくれる学生も多かったので、こういった広報も効果的ではないかと考える。

4. 反省点

秋冬編では今までとは異なった広報の手段であったため、段取りが悪かった部分がある。また、効果がわかりづらいという課題がある。今回行った広報の効果がわかるような手段を探していく必要があると感じる。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 春編

春編は学生スタッフ間の情報共有不足が課題となったため、Let's ボランティア係の中で、誰が何をしてどこまでできているかを伝え合うことが必要だと考えた。

(2) 夏編

夏編は食堂前にブースを出さずに行った。手軽に情報を発信できるブースを出した方がよいのではないかという意見もあったが、ブースを出しても人が来ないというこれまでの経験を踏まえて出さなかった。次回以降、ブースを出すことのメリット・デメリットを再考し、検討していきたい。

(3) 秋冬編

今回は初めての試みとしてやってみたボランティアカレンダーや、掲示板の広報の効果について、効果がわかるような手段を検討する必要がある。それを踏まえた上で今後の反省や検討ができるので、効果を知る方法についてあらかじめ考えておくことは大切だ。

6. 経 費

消耗品(用紙、ファイル、ペンなど) 3,995円

〈報告者：正中 葉帆〉

事業名	アタックボラセン2018（継続企画2年目）
日時	〈第1回目〉2018年7月16日（月）～20日（金）（第2・3・4講時） 〈第2回目〉2019年1月15日（火）～18日（金）（第2・3・4講時）
場所	龍谷大学深草キャンパス内（食堂・旧図書館）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	学内でのアタックボラセン対象者 第1回目…71名（アンケート回答者数） 第2回目…101名（声を掛けた合計人数）
企画メンバー （学生スタッフ）	平尾匡識（文学3） 玉川隆明（文学3） 村井俊介（文学3） 吉田 響（文学3） 寺島安里沙（経営3） 桑原田海（法学3） 富上弥生（政策3）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）を学生に知ってもらうために、広報誌『ボラゴン』とセンターの活動に関するチラシを配布しているが、センターへ来室する学生は稀である。

その現状から、学生のセンターに対する認知度・利用者数向上を目指し、学生スタッフは学生に対して直接アプローチする必要があると考えた。

また、学生への働き掛けだけでなく、同時に学生スタッフのコーディネート力を向上させる目的もあった。

- ・ボランティアに興味がないから（10名）
- ・センターの利用方法がわからないから（10名）



2. 概要

第1回目は、今後の活動へ反映・還元するための情報収集を目的に、学生に向けてアンケート調査（センターに対する認知度、ボランティア活動への興味・関心）を行った。

第2回目は、第1回目の調査で得られた結果をもとに、センターの場所・利用方法についての広報活動とボランティアを紹介する出張コーディネートを行った。

3. 参加者の声・得られた効果など

第1回目に行ったアンケート調査の結果は、以下のとおりとなった。

■センターの認知度

センターの存在を知らない。	34名
センターの名前は知っている。	29名
センターの場所を知っている。	5名
センターを利用した事がある。	3名
合 計	71名

※センターを利用した事がない理由（一部紹介）

■ボランティアの分野別関心

1位	災害	全体の20%
2位	子ども	全体の12%
	まちづくり	全体の12%
3位	文化芸術	全体の11%
	国際	全体の11%

その他、第1回目・第2回目を通して、学生スタッフから以下の感想が得られた。

【良かったこと・うまくいったこと】

- ・緊張したけど声掛けを頑張った。
- ・自身のボランティア体験を話せた。
- ・臨機応変に対応できた。
- ・役割分担して声掛けをした。
- ・コーディネート経験が浅い中での活動だったため良い経験になった。
- ・意外と話を聞いてくれる学生が多かった。

【うまくいかなかったこと】

- ・緊張してうまく話せなかった。
- ・押しが弱かった。
- ・詳しい話ができなかった。

- ・一方的に話しかけすぎた。

4. 反省点

本企画の実施時期は、前期・後期共に定期テスト前だったため、調査・広報場所の食堂や交流スペースでもテスト勉強をしている学生が多く、話しかけづらいという事があった。今後も実施する場合は、時期をしっかりと検討する必要があると感じた。

第2回目では、準備段階で企画メンバーが集まれる機会が圧倒的に少なかったため、活動の情報共有はLINEのみで済ませることになり、齟齬や消化不良が生じた。そのため、一部の学生スタッフにも誤解を招いてしまう事になった。この現状・結果から、直に話し合う事がいかに大切であるかを痛感した。

5. 学んだこと・今後の課題

本企画を通じて、センターや学生スタッフの課題と今後取り組んでいくことについて、改めて以下の通り浮き彫りにする事ができたと実感している。

- ・第1回目の調査結果では、センターの認知度が低いとの結果だったため、一人でも多くの学生にセンターの存在を知ってもらい、センターを利用してもらうために、広報活動を積極的に行っていく。
- ・学生スタッフは、ボランティア活動に参加し

知見を得る“インプット”と、その経験や魅力を学生に伝える“アウトプット”の2つを目指して活動していく。

その他にも、「センターの企画として実施するものには、皆で協力しよう」と企画メンバー以外の学生スタッフにも思ってもらえるような働きかけが必要だと感じた。

本企画の継続は後輩たちの意思に任せるが、学生スタッフの基本的な活動の1つであるコーディネート（ボランティア相談対応）に大きく影響している取り組みなので、これからも本企画を通じて、センターとボランティア活動の啓発を行って欲しいと願っている。



6. 経 費

A4サイズ用紙500枚	240円
-------------	------

〈報告者：平尾 匡識〉

事業名	第96回龍谷祭への出展（深草）（継続企画17年目）
日時	2018年11月2日（金）～11月4日（日）
場所	龍谷大学深草キャンパス22号館107教室（展示）／21号館と4号館の間（模擬店）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	展示来場者数：535名／模擬店販売食数：442食
企画メンバー （学生スタッフ）	■展示： 延安美菜（文学4） 玉川隆明（文学3） 土橋茉奈（文学3） 村井俊介（文学3） 吉田 響（文学3） 木村太翼（文学2） 吉田 樹（法学2） 大嶋優作（政策2） 川村有希（政策2） 佐藤鴻河（政策2） 樋口大輝（政策2） 松田侑子（国際2） 神田瑞季（経済1） 西野亜優（経済1） 世田丈貴（法学1） 西村志穂（政策1） ■模擬店： 中野優太（文学3） 寺島安里沙（経営3） 織田香朱美（政策3） 富上弥生（政策3） 中川寛喜（経済2） 長谷川鈴音（経済2） 平居凜華（経済2） 竹本智紀（法学2） 松岡俊希（法学2） 上田雄介（政策2） 武村祐資（政策2） 黒崎雄太（経済1） 松尾宗次朗（経済1） 渡久山盛陽（政策1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）は、毎年龍谷祭でボランティアに関する展示と模擬店に取り組んでおり、今年度はそれぞれ以下の趣旨で実施した。

■展示：

昨年度の展示アンケートや学内での啓発企画『アタックボラセン』（深草）『ニーズ調査』（瀬田）などの回答で多かった「ボランティアに対するハードルが高い」ということや、昨年度は学生よりも一般の来場者が多かったことなどを踏まえ、次の点を目的とした。

- ・ボランティアへの興味関心を少しでも持ってもらえるように、全ての来場者が楽しめる内容でイメージアップを図る。
- ・一般の方はもちろん、学生の興味関心も引く。
- ・本企画を通して学生スタッフの知識や能力の向上を図る。

■模擬店：

- ・模擬店を出店することにより、センターの認知度向上を図る。
- ・活動を通じて得た利益の一部を寄付する。団体や寄付金額等は龍谷祭終了後に企画メンバー内で確定し、残金は活動資金に充てる。

2. 概要

■展示：『ボランティアの果てまでイッテQ！』

模造紙による紹介だけでなく、実物を用意したり、手に取ったりすることができるものを多くし、来場者がより身近に感じ目を向けてもらうことを目指して以下の各種コーナーを運営し



た。

- ①震災など災害に関するコーナー：今年度起こった災害や学生スタッフの体験談なども交えながら紹介した。
- ②動物愛護に関するコーナー：昨年度の動物愛護企画『STAR』に引き続き、愛護団体の活動について伝えた。
- ③コーデブース：学生スタッフのボランティアの一日をまとめたスケジュールを作り、普段の活動よりわかりやすくコーディネートを行った。
- ④役に立つ情報のコーナー：日常で目にするヘルプマークなど、何気ないマークや使える情報について展示した。
- ⑤ごみ・環境問題に関するコーナー：3Rと私たちの生活で心掛けられること等について紹介した。
- ⑥子どもコーナー：『サマーフェスティバル2018』で使ったピンポンカップインゲームで子どもが遊べるコーナーを設置した。
- ⑦学生向けのコーナー：センターの事業紹介

や多くの学生が参加しているボランティアの紹介などを行った。

■模擬店：『天使のカステラ』

1食150円のベビークステラを販売した。中身はプレーン・チョコ・チーズ・たこを、ソースはいちご・チョコソース・メープルシロップ・抹茶・たこ焼きソースを用意し、それぞれ選んでもらえるようにした。



3. 参加者の声・得られた効果など

■展示：

今回は足を止めて展示物を見たり、学生スタッフと会話をする来場者が非常に多かった。アンケートによると「身近なことに着目してるのにびっくり。自分も日常のことで考えてみます」「特に知ってほしい！というのがわかりやすく書かれていて、すごく興味を持ちました」といった回答や、少なくとも一つのコーナーに対して「興味を持った」「知れてよかった」といった声を多く聞くことができた。また、コーデブースでは「南区民ふれあい祭り」での参加希望者があったなど、学生の興味関心を引くことができた。

■模擬店：

購入者からは「いろいろな味があってこの値段はすごい」「ほかのところよりも美味しい」といった声があった。また、焼いている間にセンターについての説明も行うこともできた。

4. 反省点

■展示：

- ・来場者が多い時間帯になると対応しきれないことがあったので、人員を増やすなどの臨機応変な対策が必要だった。
- ・準備の際に一人ひとりの作業量が多く、負担が大きかった。

- ・龍谷祭実行委員会との連絡がうまく取れておらず、一部の情報に食い違いがあった。

■模擬店：

- ・調理機器が1台だったため、購入者が多い時間帯になると10分以上の待ち時間を作ってしまった。
- ・中身とソースの組み合わせを楽しめるように数種類からの選択制にしたが、注文の聞き取りが難しかった。
- ・最初から低い値段設定だったため、原価回収がギリギリになってしまった。更に、端数の出る値段だったことから、釣り銭の対応に手間がかかってしまった。
- ・販売見込数でソースなどを購入していたため、大量の余りが発生した。

5. 学んだこと・今後の課題

■展示：

一度に多くの人々が来場しても円滑にまわせるよう、学生スタッフ一人ひとりの対応範囲を広くすべきだと感じた。また、龍祭当日の広報手段が限られているため、どのように集客するか今後考えていく必要がある。

■模擬店：

今年はスイーツ系で出店した結果、主食系に比べてピークの時間帯が遅めになってしまうため、それに伴い売上数も減少してしまうことが分かった。これからもスイーツの場合はそのことを念頭に置く必要がある。また、消費電力を考慮しつつ、調理機器を2台にすることが可能か実行委員会に相談するべきであると感じた。

6. 経費

展 示：消耗品費	13,707円
模擬店：総売り上げ	66,330円
経費 材料費	37,750円
冷蔵庫費	4,000円
会議机代	4,529円
利益	20,051円

※利益のうち、1万円を日本赤十字社を通じて平成30年北海道胆振東部地震災害地震への義援金として寄付し、残りは活動費にあてる。

〈報告者：木村 太翼／佐々木 大悟〉

事業名	第96回龍谷祭への出展（瀬田） つながり～今、私たちにあるもの～（継続企画16年目）
日時	2018年10月27日（土）・28日（日）〈展示〉 10時00分～17時00分 〈模擬店〉 10時30分～16時00分
場所	瀬田キャンパス2号館多機能室1・2（展示）／3号館付近（模擬店）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
来場者人数	来場者数（展示） 271名（1日目155名・2日目116名）
企画メンバー （学生スタッフ）	曾根竜也（社会3） 美濃優磨（社会3） 橋本昌尚（農学3） 中川和謙（理工2） 二木亮英（社会2） 瀬戸山瑠衣（農学2） 青山友香（社会1） 古賀愛日香（社会1） 平井美来（社会1）

1. 趣旨・目的

- 龍谷祭には多くの学生や地域住民が来場する。そこで、多くの人にボランティア・NPO 活動センター（以下センター）の存在や活動を知ってもらうと共にセンターの活用を促す。
- 展示では「つながり」をテーマに、来場者がボランティアに興味や関心を抱き、魅力を感じてもらえるようなボランティア啓発活動を行う。
- 龍谷祭に向けて展示製作を学生スタッフ全員で進めることで、ボランティアやセンターへの理解を深める。模擬店も含め、その運営を協力して行うことで組織力、団結力の向上を目指す。

2. 概要

(1) 展示

場 所：2号館多機能教室1・2

内 容：①ボランティア・NPO 活動センター紹介

- ・センターの役割
- ・学生スタッフとは
- ・登録サークルの紹介

②学生スタッフ企画紹介

- ・大津祭企画
- ・コミュニティ企画
- ・子ども食堂企画
- ・収集ボランティア企画
- ・スペシャルオリンピックス企画

③復興支援・災害についての展示

- ・東日本大震災復興支援ボランティア
- ・大阪北部地震
- ・平成30年7月豪雨災害

・防災グッズの紹介

④体験型展示（ポストイット形式）

・災害時あなたなら何をしますか？

(2) 模擬店

場 所：3号館付近

内 容：ロシアンたこ焼き

価 格：5個入り200円

個 数：2日間で214食

売上金：42,800円

収 益：17,980円

利益の使途：学生スタッフの今後の活動に使えるものを購入



3. 参加者の声・得られた効果など

- ・活動の写真が多く、説明がわかりやすかったので、ボランティア・NPO 活動センターの理解が深まった。（本学学生）
- ・震災関係の展示で、現地での活動や募金活動など様々な活動していることがわかり、素晴らしいと思いました。（本学学生）
- ・スペシャルオリンピックス、子ども食堂の展示が特に印象に残った。（一般）

アンケートに上記のような記述があったことから、企画やセンター事業などの勉強会を開き、ボラセンについて知る機会を多く設けた成果だと考えられる。また、多くの人、団体とのつながりがあることを伝えるという目的を達成する

ことができたと考える。

4. 反省点

- ・展示の説明についての勉強会に来ることができなかった学生スタッフへの対応を具体的に考えていなかった。
- ・展示物の確認が不十分で、修正作業が本番直前となった。
- ・模擬店に関して、1日目にたこ焼きの分量と受付の対応の仕方の細かい内容を決めていなかったため、当日学生スタッフの間で戸惑いが見られた。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・昨年の反省を踏まえ、学生スタッフが一から展示物を作成することにより、センター事業や企画についての理解をより深めることができた。
- ・展示に関して早くから準備を始めることができたため、勉強会を多くすることができ1回生も来場者に対してしっかり対応することができた。
- ・展示物を作成するにあたっては、職員と企画メンバーで下書き、清書と段階を踏み確認してもらうことで、誤った情報を載せないよう

にする。

- ・模擬店に関して1日目は仕事内容のマニュアルを作成し、学生スタッフで共有することで1日目の問題点が解決された。来年は、試作会までに道具を揃えて分量を確認、調整し、受付の対応の仕方の細かい内容や材料の分量、呼び込みについてなど、詳しく記載されたマニュアルを作成し、当日までに学生スタッフに共有しておくことで、より円滑に進められるようにしようと思う。

6. 経費

消耗品（インクなど） 6,598円

〈報告者：二木 亮英〉



事業名	子ども食堂を広げよう（新規企画）
日時	子ども食堂見学体験・子ども食堂図鑑の作成 2018年6月～10月 子ども食堂講座 2018年12月12日（水） 17時30分～19時00分
場所	見学体験：各子ども食堂 講座：瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	講座：27名（一般学生 13名・学生スタッフ 14名）
企画メンバー （学生スタッフ）	奥村 遥（社会2） 二木亮英（社会2） 正中葉帆（社会2） 松田 廉（社会2） 山田瑠莉（社会2）

1. 経緯・目的

近年子ども食堂の数が全国的に増えている。2018年4月現在、滋賀県には約95箇所もの子ども食堂がある。2017年度に瀬田学生スタッフが学内で実施したボランティア意識調査では、子ども分野に興味があるという学生が多かった。

また、現在、子ども食堂からの学生ボランティアの募集依頼が急増している。この現状から、私たちは学生スタッフとして何かできることはないのかと考え、2つの思いからこの企画を行う。

（1）この活動をきっかけとして龍大生に子ども

食堂のことを知ってもらい、理解を深めるきっかけとする。さらに、子どもをとりまく社会課題についても関心をもってもらう。

(2) 子ども食堂に集う子どもたちに、普段とは違った時間を学生と過ごしてもらう。学生の特徴である若さ、元気や、学内サークル活動での特技を活かし、学生が関わることで子どもたちにより豊かな経験をしてもらう。

我々企画メンバーは龍大生と子どもたちを繋げる架け橋としての役割を担う。

2. 概要

(1) 子ども食堂見学体験・子ども食堂図鑑の作成

日程：6月から10月に実施

場所：大津市

- ・NPO 法人子どもソーシャルワークセンター
- ・NPO 法人 BRAH=art.
- ・「せたこども café」

草津市

- ・NPO 法人宅老所 心 「楽しい放課後心」

栗東市

- ・生活協同組合 しが健康医療生活協同組合
- 「にじの家サロンこども食堂&寺子屋」 など

内容：子ども食堂見学体験後にセンターにて子ども食堂図鑑を作成。



(2) 子ども食堂イベント

日程：7月と12月の2回

場所：こどもソーシャルワークセンター

内容：学内料理サークル Osteria が子ども食堂を訪問し、子ども達と一緒に夕食を作り、食事をする計画を立て、調整をしていたが、サークルの方の体調不良により中止



となった。

(3) 子ども食堂講座

日時：12月12日（水）17時30分～19時00分

場所：学生交流会館地下1階カンファレンスルーム

講師：幸重忠孝氏（こどもソーシャルワークセンター代表）

内容：「子ども食堂を知ろう！～今、大学生にできること～」をテーマに講演会とワークショップを実施した。

講演会では、子どもが抱える格差や貧困の問題について、幸重氏の経験からお話いただいた。子どもの課題はなかなか表面に出てこず、近年見えにくさが増しているという現状をお聞きした。また、団体で実施されている子ども食堂での学生の関わりや、参加するにあたってのアドバイスなどをお話いただいた。

ワークショップでは、学生スタッフがそれぞれのグループのファシリテーターとなり、「今、自分たちにできること」という内容でワークショップを行った。

ワークショップを通じ、学生が自分たちにできること、学生だからこそできること、求められていることがあることに気づくきっかけとなった。

グループの中には、さっそく子ども食堂と一緒にいく計画をたてているチームもあり、盛り上がった。



3. 参加者の声

- ・子どもと関わることがあまり得意ではないが、自分にもできることがあるのではないかと考えた。
- ・自分の特技や趣味を活かしたボランティアがないかをずっと考えていた。そんな中このようなワークショップに参加することによって、自分ができること、やりたいことを考え見つけ出すことができた。
- ・何回か子ども食堂にボランティアに行ったことがあるが、この講演会、ワークショップを通して、より深く知ることができた。今後もっと知りたいし、子ども食堂のボランティアに関わりたと思った。
- ・行ったこともなければ活動内容も知らなかったもので、非常に充実した講座で興味が湧いた。
- ・自分が入っているサークルでもメンバーで子ども食堂に参加したいと話していた。今回の講演を通して、自分たちの強みを活かしてボランティア活動に参加できるのではないかと考えた。
- ・食事や生活のマナーや人との関わりなど、本来であれば家庭の中で子どもが体験し学ぶことであるが、子ども食堂のような場所を通して社会全体で育てていくことの大切さに気付かされた。自分も力になれるのではないかと考えた。

4. 反省点

- (1) 子ども食堂見学体験・子ども食堂図鑑の作成
 - ・子ども食堂へ行き、作成した子ども食堂図鑑の内容がまだまだ少ない。図鑑なのであ

る程度の数が必要。

(2) 子ども食堂講座

- ・ワークショップ終了後のフリー時間に、子ども食堂へのボランティア活動の紹介をもっとするべきであった。たくさんチラシを配架していたので、学生スタッフが案内や紹介を個別にできればボランティア活動への参加がスムーズだったと思う。

5. 学んだこと・今後の課題

- (1) 子ども食堂見学体験・子ども食堂図鑑の作成
 - ・担当を決めて各子ども食堂へ行くことで、幅広い繋がりができた。子ども食堂図鑑は見やすくまとめることができた。まだまだ数が少ないので、今後も内容を増やしていきたい。
- (2) 子ども食堂講座
 - ・参加者募集のために授業内広報をさせていただけた。
 - ・参加者を集めるために、友人や知り合いに積極的に声をかけていくのが効果的であった。ぜひ、参加してもらいたいという思いが学生スタッフに必要なと思う。
- (3) 子ども食堂イベント
 - ・サークルへ依頼する際、体調不良などの緊急時に備えるためにも、複数の方に協力してもらえよう願う。

6. 経 費

消耗品（ファイル、ペン） 1,522円

〈報告者：二木 亮英〉

事業名	収集ボランティアに参加しよう！（新規企画）
日時	第1弾 2018年7月2日（月）～31日（火） 第2弾 2018年10月3日（水）～2019年2月28日（木）
実施主体	ボランティア NPO 活動センター（瀬田）
収集結果	本374冊、CD19枚、書き損じはがき147枚
企画メンバー （学生スタッフ）	藤野凌河（社会4） 西野大輝（理工3） 乾 佐枝子（社会3） 井上沙雪（社会3） 村田大河（社会3） 山元 樹（理工3） 高岡宏幸（社会2）

1. 経緯・目的

収集ボランティアは、実際に現地におもむくボランティアに比べ、日常のなかでより手軽にできる。そのため、忙しい人でも協力でき、ボ

ランティアをより身近なものとして認知させることができる。この企画は、センター来室者に向けて、収集ボランティアを紹介することで、収集ボランティアを知るきっかけをつくるとと

もに、ボランティア参加のハードルを下げることを目指す。

今回の活動では、認定 NPO 法人アクセスと提携して収集ボランティアを行った。その際、アクセスのスタッフに話をうかがう機会を設け、どのような活動をされていて、集めたものがどういったところで活かされるのかのお話を聞いた。アクセスは、フィリピンで「子どもに教育、女性に仕事」を提供する活動を続けている。私たちは、団体の目的であるフィリピンの貧しい人々の支援をしたいという思いに共感し、協力したいと考えた。

2. 概 要

(1) 期間

①2018年7月2日（月）～31日（火）

②2018年10月3日（水）～2019年2月28日（木）

(2) 場所

ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）

(3) 内容

- ・来室者に収集ボランティアについて説明し、アクセスの「ココロ便」で募集している物品（本・CD・DVD・ゲーム）のなかで、不要なものが自宅にあれば持ってきてほしいと伝える。それについてのチラシをわたし、ぜひ協力してもらえよう広報する。
- ・集まった物品を段ボールに詰め、「ココロ便」のインターネット無料集荷を申し込む。書き損じはがきは、アクセスへ郵送する。

(4) その他

プレゼント企画について

参加者の中から抽選で、フェアトレード商品のグリーティングカードをプレゼントした。

(5) 参加対象

龍谷大学生・教職員

(6) 広報

チラシ配布、立て看板、掲示板、掲示物、SNS、授業前広報

(7) 収集結果

第1弾：本25冊、CD6枚、書き損じハガキ111枚

第2弾：本349冊、CD13枚、書き損じハガキ36枚

すべて団体に寄付

3. 参加者の声・得られた効果など

企画に参加してくれた学生が「どこかに行くこともなく、お金を使うこともなく、ボランティアができたので、とても手軽にできて良いと思った。もっとこのようなボランティアが広ま

れば良いと感じた」と話してくれた。

- ・日常生活の中でできるボランティアがあることを、一般学生に知ってもらうことができた。
- ・現代の社会問題（今回ならフィリピンの貧困の問題）を、一般学生に知ってもらうことができた。
- ・フィリピンの子どもたちへの支援につながった。
- ・本企画全体を通して、学生スタッフも収集ボランティアやそれを行っている団体、フィリピンの問題について知ることができた。



4. 学んだこと・今後の課題

収集しても、あつまった物品が思ったより少なく、活動しながら広報活動をいろいろと工夫して行った。広報活動をどれだけ・どのように行うかが本企画においてとても重要であると感じた。

反省点として、収集ボランティアや寄付先の認定 NPO 法人アクセスについて、一般学生に十分に説明するのに必要な情報が、学生スタッフ全体で共有できていなかったことがあげられる。後期ははじめに企画メンバーで勉強会を行い理解を深めたが、それをほかの学生スタッフに十分に伝えきれていなかったことが原因である。次回からは、学生スタッフ全員が収集ボランティアと寄付先について説明できるように始める時点で情報をしっかりと共有する。

5. 経 費

フェアトレード商品	2,000円
消耗品	2,100円
合計	4,100円

〈報告者：乾 佐枝子〉

事業名	私たちがあなたに伝えたい3.11～あの震災を過去で終わらせない～(新規企画)
日時	〈ワークショップ〉第1回：2019年1月15日（火）17時～18時45分 第2回：2019年1月18日（金）17時～18時45分 〈展示〉 2019年1月17日（木）～1月29日（火） 出入自由
場所	〈ワークショップ〉 深草キャンパス和顔館 第1回 B-106／第2回 B-203 〈展示〉 和顔館1階ギャラリー
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	〈ワークショップ〉 第1回6名（うち学生スタッフ5名） 第2回41名（うち学生スタッフ34名） 〈展示〉 出入自由としていたため、人数カウントは行っていない。
企画メンバー (学生スタッフ)	坪下大介（文学4） 藤原 純（文学4） 辻 祐児（法学4） 日野萌絵子（法学4） 西山大樹（政策4） 松坂智彰（政策4） 米本圭吾（経済3） 川村有希（政策2） 安本大輝（法学1）

1. 経緯・目的

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に未曾有の被害をもたらした。震災後、龍谷大学は宮城県石巻市を中心にボランティアを行い、被災地と関わり続けている。ボランティア後、現地で見えて聞いて感じたことを周りの人に伝えようとしたがなかなか伝わらず、東日本大震災への関心が薄れ、記憶が風化していることを痛感した。そのため、私たちが東北で見て聞いたことを伝えていく必要性を強く感じた。

また今年度は、大阪北部地震や平成30年7月豪雨が発生した。さらに将来的には、南海トラフ大地震の予想もされ、命を守るためますます一人ひとりの防災対策が必要不可欠となってきた。ところが、自然災害への関心は高まっているにもかかわらず、実際に行動に移している人は少ない。

このような状況をふまえ、私たちは東日本大震災について見つめなおし、その教訓を活かす事が、未来の私たちを守ることに繋がると考えた。そこで、本企画では「雄勝町の現状・過去を伝える」「防災について行動するきっかけをつくる」ということを目的に展示とワークショップを行った。

2. 概要

■ワークショップの実施

①～③の流れでワークを実施し、東日本大震災について考え、防災や減災について見つめるきっかけを作った。

①「東日本大震災の発災当初何をしていたか」「大阪北部地震の発災当初何をしていたか」というテーマで、グループごとに話し合う。

②『防災クロスロード』を実施

③学生スタッフのボランティア体験談を聞く

ワークは、2日間同じ流れだが内容が違うものを実施した。1日だけの参加でも学ぶことができ、2日とも参加すれば異なった内容の防災クロスロードを体験し、別のボランティア体験談を聞くことによって、様々な角度から東日本大震災について考えてもらう機会とした。

■展示の実施

メンバーが、東日本大震災復興支援ボランティアに参加する中で想ったり考えたりしたことを、雄勝町の写真を交えながら展示した。写真は雄勝町の発災前後の様子や特産品、ボランティア活動中の様子を撮影したものを用いた。これらのことを通じて、雄勝町を中心とした東日本大震災の被害や現地の様子などを伝えた。また、参加者が自由に記入できるメッセージコーナーを設けた。



3. 参加者の声・得られた効果など

企画準備の一環としての防災センターへの訪問や、外部で開催された東日本大震災に関するイベントへの参加等を通じて、メンバー自身が

「防災」について見つめなおし、防災意識を高めることができた。さらに、東日本大震災復興支援ボランティアの体験談や自分たちの防災観について話し合う中で、様々な価値観に触れ、考え方を共有することができたことから、以前より多面的な見方で震災・防災について考えることができるようになった。また、様々な立場の方への配慮について改めて考えることもできた。

参加者アンケートや寄せられた以下の声などから、東日本大震災について見つめ直す機会や防災について行動するきっかけを作れたと考えている。

■ワークショップ

- ・時間が経って、東日本大震災の被害を忘れていたし、同じ国で起こったことなのにどこか他人事のように感じてしまっていた。しかし、今回の企画で再確認することができた。
- ・ボランティア体験談を通して学生の心の変化が生の声で語られていたのが良かった。また発表内容が簡潔でわかりやすく、聞く側への配慮もあり、ダイレクトに心に伝わった。
- ・クロスロードを通して震災について考え、自分とは違った考えを知ることができて良かった。
- ・ハザードマップの確認や、防災グッズの準備や災害時における家族との連絡手段の確認をしたいと思った。

■展示

- ・ワークショップは1人のボランティア体験談しか聞けないが、展示では学生スタッフ一人ひとりの想いや考えを知ることができて良かった。
- ・東北地方の現状を知り、震災直後がどういったものだったか少しイメージすることができた。
- ・風化させないためにもこのような活動が継続されることが大切だと思った。



4. 反省点

■ワークショップ

2回目のワークショップでは、参加者が41名（定員30名）と多く、進行の都合上メンバーが遅刻者の対応に遅れる場面があった。遅刻者への対応の仕方をあらかじめ話しあうことや、メンバーの人数を考慮した参加者の人数制限を行う必要性を感じた。

また、防災クロスロードで事例を紹介する際、分かりづらい表現があったので、文言の確認を徹底する必要がある。

■展示

前日準備の際、展示の搬入や設営時間の想定を誤り、予想以上に当日の搬入や設営時間がかかった。今後は前日準備の時間を設け、余裕のある状態で来場者を迎えられようようにしたい。

また、展示文章について段落の分け方や文言の表現に統一性がなかった。文言や段落の統一を可視化した上で、メンバー全員で慎重に見直すが必要だと感じた。

その他、今回は展示会場に来場者が自由に「展示を見た感想」を記入するメッセージボードを作成し設置した。しかしながら、来場者全員に記入してもらうことが難しく、来場者数が正確に把握できていない。今後の企画に活かすためにも来場者を把握できるような術を検討していきたい。

5. 学んだこと・今後の課題

企画メンバーのミーティング日程を早くから調整し、週に3回、1講時に行った。参加できない人には、ミーティングで進行状況の共有を行い、議事録作成を徹底した結果、発言しやすい雰囲気や作業の円滑化につながった。情報共有を徹底することの大切さを改めて学んだ。

今後の課題として、メンバーではない学生スタッフに「震災・防災」への関心を促す必要性を強く感じている。今回の企画で終わらず、引き続き東日本大震災に関するイベントを紹介するなど、ボランティア体験談を語り合う機会を設け、メンバー以外の学生スタッフが主体的に「震災・防災」について考えていくよう促していきたい。

6. 経 費

消耗品費（プリンターインク等） 9,858円

<報告者：藤原 純>

事業名		サークル活動・ボランティア活動情報交換会およびボランティア活動支援	
サークル情報交換会	キャンパス	深草キャンパス	瀬田キャンパス
	実施日時・参加人数	2018年4月18日（水）5団体8名 2018年7月9日（月）2団体2名 2018年9月25日（火）5団体5名 2018年11月15日（木）2団体2名 2019年1月11日（金）2団体2名	2018年4月18日（水）4団体6名 2018年7月9日（月）3団体5名 2018年9月25日（火）3団体4名 2018年11月15日（木）4団体6名 2019年1月11日（金）3団体5名
		いずれも 12時30分～13時00分	いずれも 12時50分～13時20分
	場 所	ボランティア・NPO 活動センター	ボランティア・NPO 活動センター
登録団体		ジャズ研究会 学術文化局マンドリンオーケストラ 京炎そでふれ！輪舞曲 学術文化局ボランティアサークル 手話サークル 国際ボランティア学生協会（深草） 応援リーダー部 落語研究会	アカペラサークル MOUSA 華舞龍 Sept Couleur 社会福祉研究会（S.W.A.P） 手話サークル Do Activity Yourself マジック&ジャグリングサークル Mist 国際ボランティア学生協会（瀬田） うみいろ 龍谷コミッカーズクラブ
		計8団体	計9団体
活動支援	依頼件数	48件	
	調整件数	68件	
	成立件数	31件	
実施主体		ボランティア・NPO 活動センター	

1. 経緯・目的

学内のサークルとの関係をつくり、ボランティア活動を促進することを目的とし、学内サークルとの連携強化、学内でのセンターの認知度向上、サークルの地域活動のサポート等を目指し、サークル活動・ボランティア活動情報交換会の実施、および、サークルへのボランティア活動支援を行っています。

2. 概 要

(1) サークル登録制度

学内のサークル（宗教局、放送局、学術文化局、体育局、各種委員会や一般同好会）のうちボランティア活動への参加、情報提供を希望するサークルが登録を行っています。（ボランティア活動以外のサークルも登録対象）

(2) サークル活動・ボランティア活動情報交換会

年間5回両キャンパスで実施し、サークル同士のネットワークづくりやサークルの活動に役立つ情報提供を行っています。具体的には、センターの活動紹介、サークルの特技を活かした

地域でのボランティア活動について説明、助成金の情報提供等を行い、新規登録サークルの呼びかけも行いました。

(3) サークルへのボランティア活動支援

自治会・子ども会・老人会等の住民組織、社会福祉施設等、地域の団体からのボランティア活動、ボランティア出演の依頼に対し、各サークルへのボランティアコーディネートを行いました。

3. 参加者の声・得られた効果など

サークルを紹介した地域の団体からは、「学生の活躍でイベントが盛り上がった」「利用者さんが大変喜ばれ、楽しい時間を過ごせた」「子どもたちがとても喜んでくれた。ぜひまた来てほしい」等の声が挙がり、学生の活動が地域交流、地域貢献につながっていることがうかがえました。

一方、ボランティア出演したサークルの学生からは「得意なことをやって喜んでもらえるのはうれしい」「毎年のように依頼してくださり、楽しみにしてもらっていることはうれしい」等

の感想が寄せられました。サークル情報交換会では、各サークルがどのような活動をしているのかを知る機会となり、参加学生からは、参加してよかったという声が挙がりました。

4. コーディネーター所感

今年度も登録サークルが、それぞれの活動の特徴を活かし、地域からの出演依頼に応じて活動しました。子ども食堂や自治会、施設のお祭りなどからの依頼が多くありました。また、ボランティア情報誌に取り上げられたサークルには、高齢者施設からの依頼が多くありました。センターの登録団体は、高齢者施設は少なく、センターや学生の活動についての認知度が低かったため、初めて活動を知った団体の方が依頼を下さったのではないかと考えています。

ボランティア出演は、日頃の成果を幅広い世代に伝える場となり、サークル活動の幅を広げていると感じます。特定のサークルだけでなく、幅広いサークル、学生が活動できるようコーディネートしていくことが課題です。

情報交換会は、年5回、昼休みの30分間で、十分な情報交換ができているとはいえませんが、他のサークルがどんな活動をしているのか、コラボレートできることはないか等、話し合っています。

今後も、情報交換会がサークル同士の交流ができる魅力的な場となるよう運営するとともに、サークルのボランティア活動の場をコーディネートし、応援していきたいと考えています。

〈報告者：國實 紗登美

（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

